

平安時代前期、最澄は近江国（現在の滋賀県）と山城国（現在の京都府）の国境にそびえる比叡山に延暦寺を開きます。その第3代座主（延暦寺の長）に、円仁がいます。円仁という名前よりも、死の2年後に朝廷から授けられた諡号「慈覚大師」のほうが、広く知られているかもしれませぬ。円仁は日本で最初に大師号を授けられましたが、この称号は限られた高僧にしか授けられていません。師の最澄や真言宗を開いた空海より先であることから、円仁の評価の高さがうかがわれます。

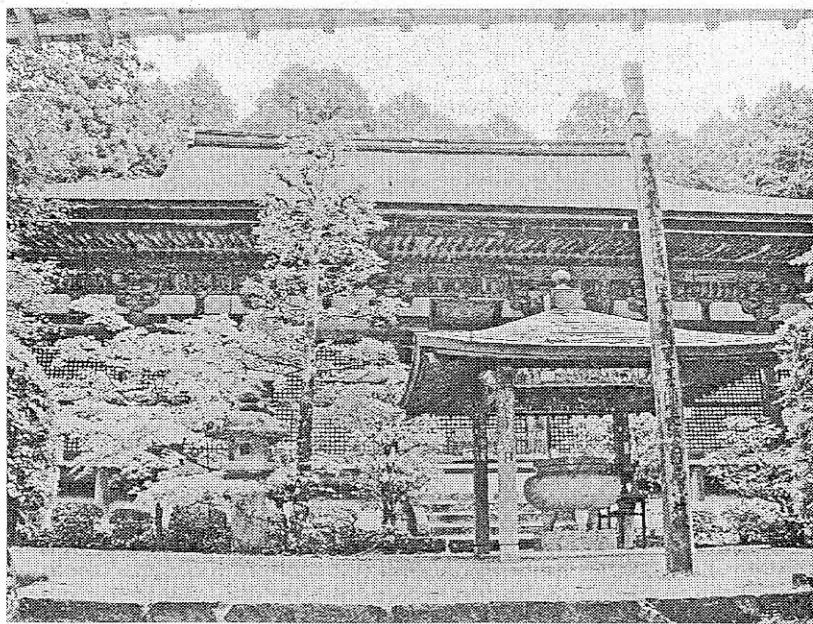
円仁は延暦13年（794）、下野国（現在の栃木県）都賀郡で生まれ、俗姓は壬生氏といいました。延暦21年（802）、9歳の時に同郡大慈寺の僧広智の弟子となりました。広智は最澄のよき理解者で、多くの弟子を最澄に師事させています。円仁も大同3年（808）、最澄が唐から帰国して延暦寺を開くと、比叡山にのぼってその弟子となり、止観の法を学びました。弘仁5年（814）、

言試（国家試験）に合格し、翌年得度（出家）しています。弘仁7年（816）、23歳のときに東大寺で具足戒を受けますが、この年、最澄の東国巡遊に従って郷里下野などを訪れました。

最澄が死去したのは、比叡山の教師となり、また、各地での布教に努めます。しかし、40歳のときに大病を患い、比叡山横川に一時籠居しました。

承和2年（835）、42歳のとき、天台の教義の勉強のため、遣唐使の一員として唐に渡ることを決意しました。しかし、2度の遭難のため、唐にようやくたどり着いたのは、承和5年（838）の3度目の航海でした。これが、結果的に最後の遣唐使船となります。

慈覚大師・円仁



円仁を中興の祖として崇敬する金剛輪寺の本堂

米国大使であった、エドウィン・ライシャワーの研究により、欧米でも知られるようになりました。

さて、唐から帰国後の円仁は、千日回降行の祖、相応和尚など後進の育成にあたったほか、東北地方への布教などを精力的に行いました。東日本を中心に、円仁開祖の由来をもつ寺院が数多く存在しています。近江でも、湖東三山の一つである金剛輪寺では円仁を中興の祖として崇敬しています。

斉衡元年（854）、60歳のときに第3代座主となり、日本の天台宗を大成させましたが、貞観6年（864）、71歳で死去しました。

天台学を研鑽しました。さらにその後、長安へと入り、6年間の修行を積みますが、時の皇帝武宗による仏教弾圧が始まったため、承和14年（847）に多数の書写した仏典などととも帰国しました。

唐求法巡礼行記』に詳しく書かれています。これは、日本人による最初の本格的な旅行記であり、玄奘三蔵の『大唐西域記』やマルコ・ポーロの『東方見聞録』と並ぶ、三大旅行記の一つとされます。さらに、当時の大陸の様子を生々しく伝える歴史資料としても、高く評価されています。

（財団法人滋賀県文化財保護協会 小島孝修）

中興の祖 金剛輪寺で崇敬